涼袋稿『風雅艶談』浮舟部——翻刻——

黄色瑞華

『風雅艶談』浮舟部は、関東学園松平記念図書館蔵（小汀文庫旧蔵）。巻子本一巻。縦二十七糎、横六百五十一糎。

凡例

一、漢字は概ね現行のものに返した。

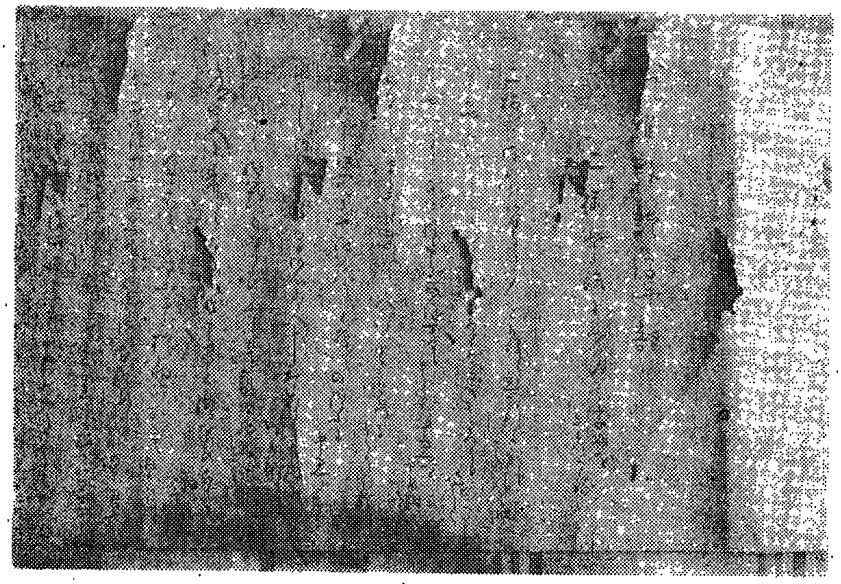
二、本文には、適宜段落を設け、句読点・濁点をつけた。ただし、底本に元からある濁点については、右傍に（マ）と注して区別した。

三、読解を補うため、新たに読みがな・漢字ルビをつけた。

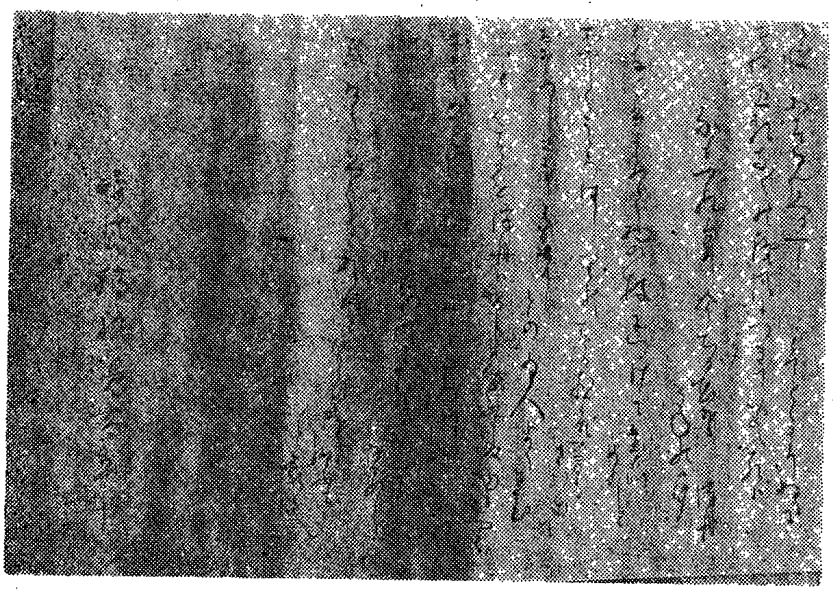
四、底本に送りがなを欠く場合は、適宜読みがなでこれを補った。

五、かなづかいは底本のままとしたが、歴史的かなづかいに合わないものは、右傍に（　）に入れて訂正した。

六、底本の片かなはそのままとした。
七、底本の誤字・当字などは、右傍に（　）に入れて注した。
八、行移りは、句歌以外は原本どおりでない。



（風雅艶談・巻頭）



（風雅艶談・巻末）

二様宇治にしのびて浮舟をたゞかる

二様ハ、ほのかなりし夕をおぼし忘るよなく、その人からの、まめやかに、おかしうもありしかなと、あだなる御こゝろに、くちをしくて、やみにし事と、ねたうおぼさるゝまゝに、中君をせめ給ひて、過にしいま閑と聞し人、いとこゝろにかゝりたれば、ありのまゝに聞させ給ハれかしと、折〳〵の給ふに、中君ハとかくゆるし給ハ□かたなる御心の人に、打あかしたらんは、いかなる事か思ひ思いだし給ハむと、おもひかへして、我は物怨んじもしたる。教えの人に成りて、その□□まいりハ□をひ出し捨たりし、とのゝいひまぎらし給ふに、猶ゆかしくて、おもひ絶たまハず。

さて、中君の御はらに出給ひしおのこ君の、いとねび増り給ふて、新たなる春にもむかハせ給へバ、宇治の里なる浮舟かたより、中君の御かたハ、包ミ文の大きやかなるに、小さきひげこを小松に付たるを贈り給ふ。二様尻目にかけ給ひて、宇治よりと聞たるに、すこしこゝろとまる□□おはすを、中君ハ折あしとためらへ給へば、その文あけて見むに怨んじやし給ハむとすると、□□へば、中君よからぬ事とはおぼせど、日頃あやしがり給ふ御こゝろしれバ、何心なくおもむけて、何かハ女どがちの文書かはしたらん。御覧ぜよと、いともさハがずゥたり給ふに、いかがあるとてあけ給へバ、

おぼつかなくとしも暮侍にける山里の
いぶせさこそ峯の霞も絶間なくて

とて、はしに是若君の御前にあやしう侍めれどと書たり。ことにらう〳〵じきふしも見えねど、おぼへなけれバ、御目に立て、又めのとの大輔があて名して、右近と書たるたて文のあるをひらき見給へバ、

かの過にし事を物おぢし(怖)給ひて、おそろしくおもひこり給へバに□り給ふべくもあらず。たゞ山里のさびしきに、折〳〵御こゝろなぐさめ給ふ。まれ〳〵御事のミ恋しがらせ給ふなど、打にほハしたるを、打かへし〳〵あやしと、御覧じてかのワづらハしき事とあるに、おもひめぐらせば、河音(蕉)の君、かの宇治へわたり通ふ事絶ずと聞くに、かやうの人かくしをき給へるなるべしと、おぼしたる事もあれば、俳諧のやつれ男に内季(記)と御入ける。

とのかねて二様(句)の御かたへもしたしく参れりけれバ、御まへにめす。参れり連句などせさせ給ふ序、二様(句)仰せけるやう□□□にハ、宇治へいまする事絶ず。寺などもいとかしこく作りたるなれ。いかでか見るべきとの給へバ、内季(記)うけ給ハり、実にいかめしく造りおかれ、本堂にハ舟後光のほとけとやらん、三十二相をそなへおはしまして、それにこそしのびてあ□□をはこび給ふなど、人々もいひあへるなど申に、いとうれしくも聞つるかなとおぼして、内季(記)をちかくまねき給ひ、その秘仏をたゞものよりのぞきなどしたる。それかあらぬかと、の□めんとおもふ人にしらるまじきかまへ□いかゞすべきとの給へバ、あなワづらはしとおもへど、内季(記)、こゝろにのぞむ事ありて、夜昼いかでおん心に入らんとおもふ比なれバ、安くうけあひ奉りて、おはしまさん事ハ、いとあ□き山越へになん侍れど、ことに程遠ふくハさぶらハず。夕つかた出させおハしまして、亥・子の時にハ、おはしつきなむ。

さて、暁にこそ帰らせおハしませと申すに、むかしもかしこの案内しりしもの、ひとりふたり。此内季(記)、扨ハ、御めのとの蔵人など、むつまじきかぎりえり給ひて、河音(蕉)ハけふあすよりもおはせじなど、内季(記)よく案内聞置て、いで立給ふ。□□□打はやミものゝゆかしきかたハ、すゝみたる御こゝろなれバ、山ふかうなるまゝに、いつしか見あゞする事もなくて、帰らんこそさう〳〵しくあやしかるべけれど、おぼすにこゝろもさはぎ給ふほど□□(宵過)る比、おはし着きぬ。内季(記)よく案内して、とのゐ(宿直)人のある方にハよらず、こなたへと立かゝれてあしがき(葦垣)しこめたる西おもてを、やをらすこしこぼち(ママ)て入れたるも、火ハほのかなれど伊予簀(ママ)ハざら(ママ)〳〵となるも、つましく、新しう清□□(げに)作りたれど、

さすがあら〳〵しく隙ありけるを、誰かハ来て見むと、打とけて穴もふたがぬなるべし、此方の屏風よりさしのぞけ□□、ワらハのおかしげなる、糸をぞよる。まづ、此顔はいつぞや見しそれ也。打つけめかしと、いとうたがハしきに、右近と名□し若き人もありて、さてハとおもひてあなたを見れバ、君ハ□□なを枕にて、火をながめたるまみ。髪のこぼれかゝりたるひたひつき、いとあでやかに、なまめきて、かのつま参といひし人也。

二様の□□夢の心ちし給ふに、女原うちとけたり。物がたりしてハ此比京え来たりし文のさたなるべし。すきたる公、おハしまして、我ものにせんとおそろしかりし事など、打ほのめきたる。それかあらぬかと聞ゆるに、川風更行おとして、眠たげにうつむきて、火もくらうなるに、しさしたるものどもとりぐしして、そこら打懸などしつゝ、うたゝねのさまによりふしぬ。君もすこし奥に入て臥す。右近北おもてにいきて、しバしありてぞきたる。さて、君のあとちかくふしぬ。眠たしとおもひけるにや、いととう、ねいりぬるけしきを見給ひて、又、せんようもなけれバ、しのびやかに此かうしをたゝき給ふ。右近聞つけて、たぞといふ。よく似せてこハづくり給へば河音のおはしたるにやと思ひて、おきて出たり、先是あげよとの給ふ折しも、ねをひ給たれバ、唯それとのゝおもひて、夜ハいたう更たらんにとて、かいはなちて入奉る。内の人々、あないみじとあハてまどへバ、さはせそ、道にていとわりなきおそろしめにあいつれば、あやしきすがたに成にてむ。火くらふせよとの給へば、あないみじきことて、火ハとり遣りつ、いかなる御すがたならんといとおしくて、我もかくろへて見たてまつる。いとほそやかになどと、かのかぐはしきこともおとらず。ちかうよりてきぬなどぬぎ捨給ひてものの給ハず、なれがほに打ふし給へば、御ふすま参りて寝つる人々をこして、すこししぞきて、皆寝ぬ。女君ハあらぬ人なりとおもふにあさましういみじけれど、声をだにせさせ給ハず。いとつゝましかりし所にて、だにわりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさましう、はじめよりあらぬおとことしり給ハゞ、いさゝかいふかひもあるべきを、夢のごゝちするにやう〳〵そのおりのつらかりし事とし此のおもひワたれるさまの給ふに、二様の公なりとしりぬ。

御供の人こハ(声)つくるにぞ、右近(うこん)きて参れり、されど、出給ハんこゝちもなく、このめのとをめして、いとこゝろなしとおもふべけれど、けふハ、えいづまじうなんある。おのこども(を)ハ、このわたりちかゝらん所に、よくかくろへてさむらハせよ。蔵人ハ京へ(へ)かへりて、山寺にこもりたりと申せとの給ふに、いとあさましく、あきれて心もなかりける。

夜のあやまち、河音(蕪)かくときこしめさば、我〳〵が罪いかならんと、たゞふるへ、おのゝけど、とりかへすべき事ならねバ、立まどふもいとなめげ(無礼)也。あやしかりし折に、いと深うおぼし入(いり)たるも、かうのがれざる御すく(宿)せ(世)にこそありけれ。人のしたるワざかハと思ひなぐさめて、しぬる人には口かためし、下ざまへハ、打(うち)かすめたるに、あないとほし。こハ(木幡)だ山ハいとおそろしき所なるを、むくつけき夜の御通ひかなと、此君とハしらざりけるに、すこし落つけど、もし殿の御使あらば、いかにいつわ(は)らん。初瀬の観世音、けふことなくてらさせ給へと、大願をぞ立(たて)たる。

日高くなれば、かうし(格子)などあげて、右近ぞちかくつかうまつる。御手水など参りたれバ、そこにあらハせ給はゞ、我もともにとの給ふにぞ、時の間も見ざらんハ、しぬべしとおぼしこがるゝ人を、こゝろざし深しとハ、かゝるをいふにやあらんと思ひたるも、あやしかりける我こゝろかなと女ハうつゝにのみおもひためし給ふ。れいは、くらしがたき、たそがれに霞める山ぎハをながめ、わび給ふに、くれ行(ゆけ)バさびしきものにぞ。けふハ人にひかれ給ひて、いとはかなう暮(くらし)ぬ。さるハ二様(句)の御けしき処(ここ)ぞとおぼゆる。くまなきあいきやう(愛嬌)づき、なつかしう見給ふに、浮舟ハまた、此(この)君のいときよ(清)げに、又かゝる人あらんやとおもふ。

二様(句)、硯引(ひき)よせ給ひて、心よりほかに見ざらんほどハ、是(これ)を見給へよとて、いとおかし(を)げなる男女、もろともに添(そひ)ふしたるかたをゑがき給ひ、常にかくてあらばやなどの給ふも涙落(おち)ぬ。

はなれじと二葉にならぶたもとかな　二様(句)

まことにしぬべくなんおぼゆるつらさもゆり〳〵かやうにあひ見てハ、なにしに尋(たづね)きつらんとおぼす。女ぬらした

まへと、筆をとりて、

かげろふやその夜の汗のかハく時　浮舟

あけはてぬ先にと、人々しはぶきおどろかし聞ゆ。つま戸に、もろともゐで給ひて、えわかれ遣り給ハず。

涙から雨引だして朝がすミ　二様

女も、かぎりなくあハれとおぼしけり、

此宇治の雪解を今朝や涙川　浮舟

風の音もいとあらましう、霜ふかきあかつきにおのがきぬ〴〵もひやゝかに成たるこゝちして、御馬にのり給ふほど、引かへすやうにあさましけれど、御供の人々いとたはぶれ、にくしと思て、只、いそがしにいそがしけれバ、我にもあらで、出給ひぬ。各も馬には乗ル、汀の氷をふミならすあしおとさへ、こゝろ細く物がなし。むかしも此道にのミこそハ、かゝる山ぶミはし給しかバ、あやしかりける里のちぎりかなとおぼす。

河音宇治に通ふ

すこしのどかになりぬる比、河音、例のしのびておハす。これは、わりなくもやつれし給ハず、いとあらまほしく、きよげにて、あゆミ入給へり。女ハいかで見え奉らんと、空さへなつかしく、おそろしきに、あながちなりし、人の御ありさま思出たるに、此とのゝ入給ふをきゝ給ひてハ、さこそ御こゝろにかゝり給ハむなど、おもふもいとくるし。河音ハ久しかりつるおこたりなどの給ふも、ことば多からず。恋し、かなしとをらびたゝねど、さまよきほどに打の給ふ。いみじくいふにはまさりて、いと哀と人の思ひぬべき人がら也。女も此かた見捨られてハとおもへば、常よりもこゝろとゞめて、かたらひ給ふに、河音、月比にこよなう物の心しりねびまさりにけりと見給ふ。朔日比の夕

月夜にすこしはしちかくふしてながめ給ふ。女ハ身のうさの添たるをなげきくハへて、一かたに物おもはし。

山のかたハ、霞へだゝ□□、寒き汀に立る。□のすがたも所がらハ、いとおかしう見ゆるに宇治橋の遙々と見ワたさるゝに、柴つゝ舟の所〳〵に行ちがひたるなど、外にてハめなれぬ事のゝとりあつめたる所なれバ、見給ふ度ごとに、そのかゝの事たゞ今のこゝちして、めづらしき中のあハれ、たぐひ添ぬべし。女ハ、かきあつめたる心の中に、催さるゝ泪ともすれば出たつを、なぐさめかね給つゝ、

ながき日の契りくらべき橋の朝　　河音

二筋の橋かとばかり夕がすゝ　　浮舟

その事ハ夢にもしり給ふまじと、おもふにもあるまじき事とおもへば、心くるしきに、河音ハ此別おしむならんと、いつよりも見捨がたく立留まほしとおぼせど、人の物いひやすからずと、あかつきにかへり給へり。

二様橋の小島に浮舟をいて出す

二様ハそのゝち、心地あしきとて引こもり給へりしが、兼て宇治に便しおきて、こゝろやすき所にたバかり出して、と内季打より、こしらへけれバ、春の雪そゞろに降出たる夕に、殿ハものいゝなんはべりて、二日バかりこもりなりと申給へば、むかへ参らん人もなく、いと心やすく出立給ふ。

京には、友待ッバかり、消残りたる雪も山ふかくいるまゝに、やゝ降つゝたり。常よりもわりなく、細道をわけ給ふほど、御供の人々も□きぬばかり、おそろしうおもふ。やう〳〵に里へつきて内季、右近に、そうそこしたり。女もあさましうあはれとおぼすに、右近もいかに成り果ん御ありさまにかと、かつハくるしけれど、今よひハ、つゝましさも忘れぬべし。いひかへさむかたもなけれバ、若き人のこゝろざまあふなからぬをかたらひ、もろともにいれた

てまつる。

道のほどにぬれたる御衣(おんぞ)の所せ(狭)うにほ(匂)ふも、もてわづらひぬ。さて、右近ハ宮のうしろミにと、とゞまり、めのとの蜘蛛をぞ奉る。常々にハ、いとはかなげなるものと、ながめ出せし。ちい(ひ)さき舟にのり給ひて、さしワたり給ふほど、はるかならん岸にしも、漕ぎはなれたらんやうに心ぼそくおぼへて、つとつきて、いだかれたるも、いとらうたしとおぼす。有明の月すミのぼりて、水のおもてくもりなきに、是(これ)なん橘の小島と申(まうし)て、御ふねしバしとゞめたるを見たまへバ、おゝ(大)きやかなる岩のさまして、ざ(ママ)れたる常盤木の影しげれり。かれ見給へ。いと、はかなけれど、千と(歳)せもふ(経)べき、みどりのふかきをとの給ひて、

散もせず咲(さか)す小島の松の友　二(匂)様

女も、珍しからん道のやうにおぼへて、

此(この)舟の行末□□のこす氷　浮舟

かのきしにつきており給ふに、人にいだかせ給ハんも、いとこゝろぐるしけれバ、ミづからいだきつゝ入りぬ。

浮舟宇治川に身を投んとす

河音(薫)の君にハ母君もゆるし給ひて、卯月十日あたり、浮舟をして、京へ(へ)むかへんとさたし給ふに、女ハいとど物おもひの親なるべし、折から母ハ、石山にもふずるとて、宇治の里にきたり給ふ。かくて浮舟の物おもひにたゞやせをとろへたるを、いぶかしうおぼせば、いろ〳〵の事いひ出給ひて、女ハたゞ一筋にこそあるべし。もし、うしろめたき事し出し給はゞ、身にはかなしくおもふともむすめとおもふなとあるに、もしやしり(知)て、いましめ給ふか。かれを聞(きき)、これをきくにも、いとゞつらく、たゞ我身をうしなひてはやとおもひつゞくるに、此(この)水の音のおそろしうひゞきてゆ

くを、母君又の給ふやう、とし月何づら近くあるものゝ、あやしき水の神の見入給ふことなどあるものを、やがて京へと聞えけるゝいかにうれしき事さむらふとあれバ、弁の尼君、されバ むかしより此河の早くおそろしきことをいひて、さいつ比ワたし守がむまごのわらゝ棹をさしはづしておち入にける。すべていたづらになる人多かる水にはべりと人々もいひあへり。浮舟ハつら〳〵聞につけ、させも我身ゆくゑもしらずなりなば、これもあへなくいみじと、しばしこそ思給ハめ。されど思ひかゝることハ、さハる所もあらじとおもへど、おやのよろづに思ひ、いふありさまねたるやうにて、つく〴〵思ひみだる。母ハなやましげにて痩たまへるを、こゝろ細しとおぼせど、京にも煩ひ給ふ人のありて、おぼつかなけれバ、よろづいひおきてかへり給ふを、浮舟やう〳〵かしらをあげ、母の御影打まもり、神ならねバしり給ふまじ。我ハはやながらふまじき身なれバ、是をかぎりの御名なるべきを、と思ふに、心あハたゞしくいひ出づべきかず〳〵も、むねをせきて涙のゝなるを、母ハ猶こゝろにかゝりて、いま一日もさぶらひたくハあれど、まかせぬ事にてかへる也。物おもふ身にハさま〴〵と立そひくる事もある物なれバ、何事も心ちしづに、はらひ捨ぬべかし。京へ伴ひたくハあれど、それもならぬ事どものさしはりはべる。しのびつゝ又参りなんとなく〳〵ぞ出給ふ。

二様河音の文まちがふ

河音の御文ハけふも来る。二様よりも御使あるを雨降くらしたれバ、たがひに見合ハず軒のつまに、かゞまり居て、浮舟の御かへりハをなじく出るを受とる。手もいたゞき帰るべく、とりちがへてもち別れたる、いとうたてあるかな。京のふたかたにも、そのかへりゆかしう待給へる。

此宇治より御使かへりたりといふに、河音をそしと、ひらき見給へば、ゝなあらぬ事どもにて、当思もそのかた□□て常に我かどへの通よりもなつかし書まぜたり。そのうちにぬすゝ出給ふべきおもむきを見て、女ハいとかたしとお

もへるさまながら、すこしなびきたり。くま〳〵みるより、あさましくあきれ給て、さては使のとりちがへたるならんとて、めさせて、事のあらましをとハせ給ふに、外の事ハしりさむらハず。京よりの御使とて、いまひとりさむらひし□事ハ、をなじ時にうけとりさむらふて、道もしばらくつれてさむらふが、いづこの人とも承らずと申。さてハ、おもふにたがハずこそあれと、その後きびしくとのゐ人きかせ給ふ。

二様ぬすミ出んとくだり給ふ浮舟□きをき

その事、宇治にかくれなければ、浮舟ハいかにして、しなばやとのミおもひくらす。むつかしき反古などハ、引さき、とうだひの火にやきつゝ、あるハ水へもなげ入させ給ふに、我より先に淡とハなりゆかんとおもへバ、いとはかなしや、めのとハふかく心にかゝれバなどかくハし給ふと、あハれなる中に、御こゝろとゞめて書せ給ふ御文などハ、人にこそ見せさせ給ハずとも、物のそこにをかせ給ひて御覧ずるなん。うき時の御なぐさみにもいへば、何かなつかしく、ながゝるべき身にあらず、おちとゞまりて、人の御ため、いとをしからん。又、是をバ、とりおきたりと、とかくおぼされんも、いとはづかし。さるハこゝろ細く物をおもふに、親にさきだちてなくなる人ハ、いと罪ふかきものなりと、ほのかに聞し事もおもふ。

廿日過るまよなかの空朧にて、例の御しるべあれバ、二様これかれを具し給ひつゝ内季を案内して、右近をよび出給ふに、御文みじかうて参りぬ。浮舟ハ、いまさら何をかこたへ侍りけんとて、御文をかほにあて、泣ふし給ふ。右近、此比のあらましをかたれバ、二様も行かたしらず、むなしき空に満ぬる心ちしていかゞハせんと、あしがきのかたを見れバ、例ならぬとのゐのかゞりあハれに、焼さして物とがめする人の声、ちかくよらんかたなくましますに、やまがつのかきねのおどろをたてに、あふりを、かのむしろに敷きて、しバしおろし奉る。やう〳〵に右近参りて、

たばかりがたきむね(旨)を申すに、二様(句)なく〳〵、

道たどる朧も人の心より　　二様(句)

さらばやとて、めのとをかへし、うしろすごげに、出給ふ。

右近かへりけるほどに、浮舟いかゞと問ハせ給へバ、たゞ申しきかるゝよしを、いひ出て語り、女はいよ〳〵みだるゝ事多く、ふし給へるに、ありつる御ありみま、かたる(語)にもいらへ(応)なけれど枕のうきたる涙をはらひて、物はかなげに、帯打(うち)かけなどし、御持仏に火参せて、しづかに経よませ給ふにも、親に先だちなん罪うしなひ給へとのミおもふ。ありし絵をとり出て見れバ、書(かき)給へる手つき、かほ(顔)の匂ひなどの、むかひ(向)きたらんやうにおぼゆ(ママ)れバ、一こともきこ(え)へで、別れまいらせしを、いかにおぼし給ハん。また、空しき夜嵐に木幡(こはだ)山や越え給ハんに、みね(峰)にもこゆる、山ありて、我ハ遠く別れ参(まゐ)す。あすハはやなき人と聞(きき)て、おどろき給(たまふ)べしと、御経もかきくれてよまれず、巻おさめ、又とのゝ、のどやかに行(ゆく)衛(方)遠かるべしとの給ひ行(ゆく)も、さこそ、うとみ(疎)捨給はむ。されど、此(この)心くるしきもながらへはつる身にこそあれと、硯の水待てうするミたるを染て、

いざしばし我身にぬるめ水の淡(泡)　　浮舟

今宵、なんとおもへど、めのといたし心をつけたれば、はかなくて過(すぎ)ぬ。

はや魂も我身(わが)にやなからん、たゞ、物わすれて、人の物がたり(語)耳にも入らず、扨ハとなれバ、人に見つけられずいでゝゆくべきかたを思ひまうけ、ねられぬまゝに、こゝちもあしく、気(ママ)もそゞろにみだれて、あけたて(明立)バ、川のかたを見遣りつゝ、ひつじのあゆミよりもほどなきこゝちするもはかなく、峯にうつろへば、めなれしかたみ打(うち)ながめて、

橋杭のみじかう暮(くる)る朝霜かな　　浮舟

かなたこなたと、書(かき)おくべき事ども、あれど、だれにもおぼつかなくてやミなんと思ひ返す。京より、母の御文もて

きたりぬ。ひらかせて見給へば、

打つゞく夢に見え給ふぞあやしく、ず経(誦)ところ〳〵によせなどし侍(はべり)。やがて、その夢の後ハ、ねぶらざりつれバ、今□(昼)寝してはべる夢に、をのれ(お)うせ(失)給ひぬと聞(きき)さむらふて、かなしく〳〵、泣(なく)とおもへバ、さめぬ、こゝろがゝり、筆にもつくしがたくさむらふ。よく〳〵御つゝし〻候へにし。人はなれたる御住居、何かにおもひけしくハ、まいりこ(ゐ)まほしき物ながら、例のまかせぬ事どもにて候。そのちかき寺々にも御ず経(誦)せさせ給へ、とて、その料のもの、こがねなど添(そへ)て、かきつらね給ふを見るに、かぎりとおもふ命のほどをしり給ハで、千代ふべき御かまへ、親のこゝろのありがたさよ。たとへ小がね(黄金)に星をさゝゆるとも、罪ある身をすくひ給ふべき〻のり(法)ハあらじ。是ハあとの御布施とも成(なる)べき事のくるしさよとて、御返事おどろ〳〵書(かき)給ふ。

世にながきたとへハなくて春の夢　浮舟

御性ハ、あすなんかへるべしとて、とゞまりぬるに、初や過る(夜)寺〳〵の鍾、声につきて聞えくれバ、

我もつれて今ちる花ぞかねの声　浮舟

はかなく書(かき)とゞめて、物の枝につけておきつ、めのと、あやしくこゝろぼしりのする夜かな、夢もさハぎて、おそろしき事どもに、とのゐ(宿直)人よくさむらへと、いはするを浮舟ハくるしと聞(きき)ふしぬ。物もたへ(絶え)、きこしめさねバ、御湯づけなど、よろづにいふを、かしらふりて、只ともしびの風にむかふをの〻ながめて、我なくハ、いづくにかあらんと、おもひやり給ふも、いと哀(あはれ)也。

涼袋稿　於兎雪亭

〈付記〉　紙幅の都合で書誌解題は別稿にゆずる。